

## 周作人詩話 一

松岡俊裕

歴史的記録は単なる徴候にすぎず、それによって具体的な個人を再構成しなければならぬ。

(H・テース)

はじめに

周作人は、清朝末年の光緒十年十二月一日（一八八五年一月三十一日）、浙江省紹興府会稽県城内の士大夫階層の家柄である周家の二男として生まれた。

長男の魯迅（本名周樹人）、周作人、それに三男の周建人の周氏三兄弟は、いずれもそれぞれの分野で名をなした人物であるが、新中国に於ては、一人周作人のみが正当な評価を与えられないできた。それは、周作人が先の日中戦争中に日本に「協力」したためであり、毛沢東が該戦争中に彼を名指して漢奸呼ばわりし、その文芸を漢奸文芸と決めつけた時、すでに新中国に於ける彼の地位は決まっていたと言える。

だが、こうした周作人評価に筆者は大いに疑問を覚えた。詳細かつ総合的な調査なしに、単に偽政権、偽組織の要職に就いて「協力」的な言動をしたという点だけを捉えて漢奸と断じ、しかも漢奸

であるという理由で過去の業績を全て否定するというのは、科学的なものの見方とは全く無縁であるまいか。

幸いこの数年来、中国国内の政治状況の好転に伴って「否定的人物」の見直し作業が進み、周作人についても、少なからぬ論文、文章が発表されるとともに、周作人の日記が公開されたり、文集や年譜が編まれたりした。しかし、この周作人の見直しは、彼の思想が「後退」する前の、五四期から一九二〇年代にかけての時期の活動に限られ、彼の思想が「後退」した一九三〇年代以降の活動（対日「協力」を含む）の見直しは行われていない。周作人の対日「協力」問題を正面から取り上げた論文もあるにはあるが（張菊香、張鉄榮「周作人が偽職に就いた前後」、これは周作人の対日「協力」を全否定する立場から、新資料を使って周作人の対日「協力」の経緯を明らかにしたものである）。

一体、共産党及び国民党（蔣介石派）の命令や支持の下に偽職に就いた者以外に、個人がそうした反日組織と関わりなく自主的に中国及び中国民族のために偽職に就き、様々な制約の下で抵抗の精神を示し続けた例も当然あった筈である。前者が「英雄」であるなら、後者も無論「英雄」である。しかし後者の「英雄」は、そのほとんどが漢奸として断罪され、見捨てられてしまった。抗日戦争に勝利し、新中国が成立してからすでに四十年余りたった今となって

は、最早無名の漢奸の再調査は事実上不可能であろうが、周作人のような関連資料が比較的豊富に残っている著名な人物についての再調査は今でも充分可能であろう。鄙見を述べれば、周作人は反日組織とは関係なく個人の判断に基づいて偽政権、偽組織の要職に就いたが、民族の魂を失うようなことはなかったと思う。従って、筆者は周作人の対日「協力」を全否定する両張氏の立場には与しえない。(ちなみに周作人は、戦後国民党によって行われた漢奸裁判に於て被告周作人側が提出した反証によると、北平(北京)青年団員楊永芳に対し手紙で証明して反日の地下工作を援護したという。また、賈芝氏の「周作人に関する若干の史料——彼と李大釗一家」によれば、周作人は、日中戦争中に李大釗の娘の夫、侯輔庭を共産党員と知った上で北京大学に職をみつめてやったり、警察の派出所に召喚された侯輔庭を助けてやったりするなど、共産党の地下組織と若干のつながりがあったという。)

筆者は、両張氏を含む中国の周作人研究者に、今後、予断や偏見を抱かずに、改めて周作人の対日「協力」を全面的に洗い直す作業に着手するように希望する。

さて、筆者はこれまで、「肯定的人物」や人物の「肯定的部分」だけでなく、「否定的人物」や人物の「否定的部分」をも研究してこそ、時代或いは人物を正確に理解できるとの立場から、中国近代文学史に於ける「否定的人物」の代表的人物、周作人に光を当てるとともに、中国近代文学史に於ける「肯定的人物」の代表的人物、魯迅の「否定的部分」——「罪」及び「罪」の意識——にも解明のメスを入れてきた。(最近、中国に於て魯迅批判は許されないとする論調が現われた。しかし、なすべきことは批判の中味の検討であって、こうした批判自体を封じようとする考えには賛同できない。)

本稿では、筆者の一連の周作人の文学活動の見直し作業の一環として、彼の詩作(旧詩及び新詩)を取り上げることとする。

### 一 少年時代(一八八五—一九〇二)

周作人の詩作(旧詩)は、科挙の試験科目の一つであった試帖詩の試作に始まる。周作人に詩作(試帖詩)の手解きをしてくれたのは、祖父の周福清(介孚と号す。以下介孚公と記す)である。周作人が、科挙不正事件を起こして「斬監候」(執行猶予付死刑)に処せられ(光緒十九年(一八九三))、省都杭州の監獄に収監されていた介孚公の身の回りの世話に当たるために杭州に赴くのは、光緒二十三年(一八九七)一月のことである。介孚公は将来の科挙の受験に備えさせるべく、周作人に作文(八股文)と作詩(試帖詩)の稽古を施した(作詩(試帖詩)の稽古には、『詩韻』の筆写も含まれていた)。また、周作人はこの杭州時代に、自主的に『唐宋詩醇』や『詩経』を読んでゐる。周作人の作詩(旧詩)の基礎はこの杭州時代に作られたと言つてよいであろう。なお、試帖詩の試作や試験の試題に関する記事が多数『周作人日記』に見えるが、これらについては、詩題を与えられて作るという試帖詩の性格に鑑みて、本稿では取り上げないことにする。(周作人の試帖詩及びその試作で現存しているものがあるか否かは不明である。)

光緒二十四年(一八九八)二月二十七日に周作人は「丁酉詩文」を自分で装丁している(同日付『周作人日記』による)。表題から推して、丁酉の年(前年の光緒二十三年)に作った詩文(試帖詩の試作と普通の旧詩並びに八股文)を集めたものと思われる。恐らくこれは周作人の最初の詩文集であろう。『周作人年譜』によれば、こ

これは丁酉の年の八股文と試帖詩の試作を集めたものであり、現存していないという。だが現存していないということは、日記の編者も該詩文集を見ていないということであり、見ていないものについて八股文と試帖詩の試作を集めたものであると推断するのは些か早計ではあるまいか。或いは何か根拠があつたのかも知れないが。

光緒二十四年五月、周作人は母親の魯太太の発病を理由に紹興に呼び戻され、彼の杭州時代は終わった。この年の十一月八日、周家の四男、椿寿（五歳）が病死し（周作人は激しい咳込みから推して急性肺炎であつたらうと回想している）、周家は深い悲しみに包まれた（前々年には父親の周文郁〔伯宜と号す。以下伯宜公と記す〕を病気で失っている）。周作人の同日付の日記には「四弟、喘息を患つて亡くなる。時刻は丁度辰の刻〔午前八時〕。胸を叩いて大いに哭く。悲しみに堪えず」と記されている。

同月二十六日夜、周作人は弟の死を悼む詩を二首（「有感」、「詠『華陀伝』有感」）作り、日記に書き留めた。

① 感有り（古風） 吹簫翁

絡緯鳴方畢 絡緯 鳴くこと方に畢りて  
又鳴促織 また促織鳴く  
夜深来伴人悲傷 夜深くして 人に伴つて悲しみ傷む  
空悲切 空しく悲しむこと 切なり

世人縦有回天力 世人に 縦ひ回天の力有りとも  
難使弟兄無離別 弟兄をして 離別無からしむるは難からん  
髮衝冠 髮 冠を衝き

淚霑臆 淚 臆を霑す

欲問昊天不語 昊天に問はんと欲すれども 天語らず  
相從地下或相遇 地下に相從はば 或は相遇はん

地下途如許 地下の途 如許く

淚如雨 淚 雨の如し

欲問在何処 何処に在るかを問はんと欲すれども

万里迢迢 万里迢迢として

安得仙人指迷路 安んぞ仙人の路に迷ふを 指すを得んや

詠 感 慨

クダマキが鳴きやみ、

こんどはコオロギが鳴き出した。

夜が深まり、家人と共に傷み悲しんでいるのだ。

寂しさと悲しさが胸を衝く。

よしんば世の中の人に天を回転させるほどの力があろうとも、  
兄弟の離別をなくすことは難しいだろう。

怒りが込み上げ、

涙が我が胸を濡らす。

何故にかくも悲しい目に遭わせたのかと天に尋ねても、天は答えてくれない。

冥土について行けば遇えるかも知れない。

冥土の道とはこうであったか。

涙が雨のごとく流れ落ちる。

弟は一体どこにいるのかと尋ねようとしても、

冥土は遙か彼方まで続いており、

この道をどう行けばいいのか教えてくれる仙人とていない。

冒頭の虫の鳴き声には、途切れることなく起こる家人の泣き声が投影されているとみてよいであろう。弟に会いに冥土に行くという設定に、弟を失った兄、周作人の悲痛な思いが込められている。なお、篇末に「右、感有り」という割註が施されている。

もう一首は、篇末に「右、『華陀伝』を讀みて感有り」という割註が施されているように、養生の術に精通し、曹操のお抱え医にもなった後漢の名医、華陀の伝記(『三國志』魏志「華佗」伝)に触発されて作ったものである。

② 「華陀伝」を讀みて感有り(古風) 吹佃翁

聞君手有回生術 君 手に回生の術有りと聞く

手足断時可能統 手足断たれし時 能く統ぐ可きや

聞君藥有起死丹 君 藥に起死の丹有りと聞く

兄弟無者可復還 兄弟の無き者を 復還す可きや

憶昔先主王西蜀 憶ふ 昔 先主西蜀に王たるに

每視妻子如衣服 毎に妻子を視ること衣服の如く

衣敝尚可縫 衣敝るるとも 尚縫ふ可し

落落丈夫胸 落落たるかな 丈夫の胸

欲向使君乞妙藥 使君に向ひて 妙藥を乞はんと欲するも  
那知洞口白雲封 那ぞ知らん 洞口 白雲の封せんとは

白雲封 白雲封し

無行踪 行踪無く

往来徒懂懂 往来 徒に懂懂たり

氣如虹 氣 虹の如く

淚霑胸 淚 胸を霑す

訳 「華陀伝」を讀んで思う

君は死者を蘇らせる術を身につけていると聞いているが、  
切断された手足(兄弟の意)を繋ぐことはできるのか。

君の袋には死者を蘇らせる仙薬があると聞いているが、  
死んだ兄弟の魂を呼び戻すことはできるのか。

そう言えば、昔、劉備が蜀の王であった時、  
常に妻子を衣服のように見ていた。  
衣服は破れても縫うことができるのだ。  
心の大きい丈夫である。

天子の使者に仙薬をお願いしようと思うのだが、  
どうして仙人の住む洞穴の入口が白雲に閉ざされていることを  
知っていようか。

白雲に閉ざされて、  
人の歩いた跡もなく、  
むだな往来を繰り返すだけだ。  
ため息が虹のように吐き出され、  
涙が胸を濡らす。

周作人は、この二つの詩の後に「吹儂翁〔周作人の別号〕自ら評す」として「悲壮なり」という感想の語を添えている。この世のものならぬ仙薬に縋ろうとするほど、周作人の悲しみは深く、痛手は大きかったのである。

同年十二月十八日夜、弟への思いを断ち切れぬ周作人は、弟を追憶する詩を一首（「冬夜有感」）作って日記に書き記した。

③ 冬夜に感有り（七絶） 吹儂翁

空庭寂寞伴青燈 空庭 寂寞として 青燈伴ふ  
倍覺凄其感不勝 倍 凄其を覚え 感に勝へず

猶憶当年丹桂下 猶憶ふ 当年 丹桂の下  
憑欄聽唱一顆星 欄に憑りて 一顆星を唱ふを聴くを

訳 冬の夜に思う

誰もいない庭は、ひっそりとしていても寂しく、燈の青い光に照らされている。

いよいよ寂しさが募り、胸が張り裂けんばかりだ。

今でも思い出す、当時、金木犀の樹の下で、  
手摺に寄りかかって、君が一つ星の唄を歌うのを聞いたことを。

篇末に「繰り返し声に出して読んだ。誠に悲しみに堪えない。胸が切り刻まれる思いだ。吹儂翁〔周作人の別号〕自ら評す」という割註が施されている。更に周作人は、翌々年の光緒二十七年（一九〇二）二月六日に、「文句は平凡だが、思いは深い。今これを読んでも実に辛い」という評語を、作詩した日の日記に書き加えている。また、この詩の後にはこの詩の評語としての性格を持つ長短句（詞）が付されている。

④ 無題（長短句） 駒隙生

月值大呂日甲午 月は大呂に値ひ 日は甲午なり  
欲向昊天教語 昊天に向ひて 教語を問はんと欲す  
不愿来生再為人 来生に 再び人と為るを愿はず  
免受人間離別苦 人間の離別の苦しみを免れんがため

吾恨不能消之山水間 吾が恨み 之を山水の間に消す能はず  
不能考之江淹賦 之を江淹の賦に考ふる能はず

憶当年 憶ふ 当年に  
運甕砌花籬 甕を運びて 花の籬に砌ね

携鋤栽桃樹 鋤を携へて 桃の樹を栽へ  
 時或折柳枝 時に或は 柳の枝を折り  
 時或徹桑土 時に或は 桑の土を徹るを  
 形尚在目前 形は 尚 目前に在れども  
 人竟掃何処 人は 竟に何処に掃せる

恨不得遺地号 地を捨てて号び得ざるを恨み  
 恨不得呼天愬 天を呼びて愬へ得ざるを恨む

聊作短句写余悲 聊か短句を作りて 余悲を写す  
 而吾之恨尚不能屈指数 而も 吾の恨み 尚 指を屈して数ふる

能はず

訳 無題

今日は十二月十八日、  
 天に聞いてみたいことがある。

私は来世ではもう人になりたくない。

人の世の別離の苦しみを味わうことが嫌だから。

私の恨みは、山水の間に消し去れぬほど深く、  
 あの江滝の賦「恨賦」にも見出せない。

今でも思い出す、当時、

弟が、瓦を運んで花の籬に重ね、

鋤を手にして桃の樹を植え、

柳の枝を折ったり、

桑の根を取ったりしたことを。  
 遊んだ跡は今でも残っているが、  
 主は結局どこに消えてしまったのか。

なんとしても地を打ち叩いて泣き叫び、  
 天に哀訴したい。

かりそめに短句を作つて、悲しい思いを表わしてみたが、  
 しかし私の恨みはなお尽きない。

駒隙生は周作人の別号。第十一句の「徹」は、前句の「折」なる  
 を見れば、「撤」の誤排か。光緒二十七年二月六日、周作人は「第二  
 句と第三句は」表現は激しいが、言っていることは実に理に叶っ  
 ている」という評語をこの長短句を作った日の日記に書き加えた。  
 翌年の光緒二十五年（一八九九）一月十三日（元宵節）、周作人は  
 正月の情景を詠み込んだ詩を二首作り、日記に書き記した。

⑤ 春 雨（五律）

滿眼薛蘿藤 滿眼 薛蘿藤なるも

春光到未曾 春光 到れるや 未だ曾てならざるや

微風飛野燕 微風に 野燕飛び

斜雨立山僧 斜雨に 山僧立つ

柳絮黃飄視 柳絮 黄にして 視に飄り

秧針緑上畦 秧針 緑にして 畦に上る

鵠原多少恨 鵠原の多少の恨み  
尽付読書鑑 尽く読書の鑑に付へん

訳 春雨

蔓草が辺り一面に生い繁っているが、  
春はもう訪れたのだろうか。

そよ風の中を燕が飛び、  
横降り雨の中に山寺の僧が佇んでいる。

黄色い柳の綿が硯に舞い落ち、  
緑色の稲の苗が畝に伸びている。

兄弟の情愛とは、なんと人を恨み嘆かせるものであろうか。  
この恨みの気持ちを全て読書のための糧としよう。

その後、周作人は「冒頭の六句は平凡でさしたる意義がなく、その上雑然としているので改めることにする」として、第三句を「斜風に 野燕飛び」(「横吹き風の中を燕が飛び」)に、第四句を「微雨に 蒼鷹喚ぶ」(「小雨の中で鷹が叫んでいる」)に、第五句を「柳線 青くして 樹に盈ち」(「柳の青い枝が樹に満ちており」)に改めた(原詩を作った日の日記による)。

⑥ 天官風箏(七律)

飄飄兩腋覺風生 飄飄として 兩腋に風の生ずるを覺ゆ  
搔首看時識是君 首を搔きて看る時 是れ君なるを識る

滿腹經綸皆在握 滿腹の經綸 皆握に在り  
遍身錦綉成文 遍身の錦繡 尽く文を成す

上天定有衝天翮 上天にては 定めて天を衝く翮有らん  
下世還為救世臣 下世にては 還た世を救う臣と為らん

自嘆無能不如汝 自ら嘆く 無能にして 汝に如かざるを  
羨君平步上青雲 羨む 君 平歩して 青雲に上るを

訳 天官風

兩脇の下から風が起ったように感じたので、  
何かしらと思つて見上げたら、それはなんと君だった。

君の腹の中は経綸で満ちており、あらゆる経綸が君の掌中にある。  
君は全身錦と縫取でできており、それらは悉く美しいあや「詩文のこと」を織りなす。

天界にいる時は、きっと空高く上ることのできる翼を持ってい

るのだらう。

そして下界では世を救う臣となるのだらう。

自分が無能で君に及ばないことを嘆き、

君がゆったりと青雲に上って行く「立身出世すること」のを羨む。

天官とは道家の三神の一つで、元宵節の日に下界に降って人々に幸せを齎すという（「天官賜福」）。周作人は、その後、第三句を「萃目の山河 皆異有り」（君の目の届く限りの山河全てに素晴らしいことが起る）に改めた。

周作人は、前年に初めて科挙（県考と府考）を受験して及第したが、成績は余り芳しくなかった。この二首は、作者自身の学力不足に対する反省の気持ちと勉学の決意を表明したものと云える。

（待統）

### 註

※ 引用詩文中（ ）は原註、「」は引用者註。

- (1) 南開大学『南開學報』一九八三年第二期所載。
- (2) 『新文学史料』総第二十一期（一九八三年十一月、人民文学出版社）所載。
- (3) 拙稿「魯迅の祖父周福清——いわゆる科挙不正事件をめぐる——」（上）、（下）、（補・一）（中国文芸研究会『野草』第二十四号「一九七九年十月」、第二十九号「一九八二年五月」、第三十二号「一九八三年十二月」）参照。
- (4) 張菊香、張鉄栄共編。一九八五年九月。南開大学出版社。
- (5) 周作人『知堂回想録』（一九七〇年五月、三育図書文具公司版）。

### 補記

①本稿を執筆中に、横浜市立大学の鈴木正夫氏から、南京師範大学編印の『文教資料』（一九八六年第四期、総第一六六期）に沈鵬年整理の文章「周作人出任偽職的原因」が載り、周作人が北平（北京）で教育督弁（文部大臣）になったのは、中国共産党地下の支持によるものであるとの新しい史実が紹介されて、中国の学界に大きな反響を呼んでいるとの御教示を頂いた（氏は中国の知人から教示を受けたという）。また、北京滞在中の一橋大学の木山英雄氏からも、最近南京で、周作人の督弁出馬は地下党（共産党）の要請によるものであるとの主旨の、自らがその連絡に当たったと称する人物の聞き書きが発表され、魯迅学会に際してことの当否を論ずる討論会が開催されたとの御教示を戴いた（氏は請われて該討論会に出席し意見を述べられたとのことである）。

筆者もかつて、周作人の対日「協力」には中国共産党の支持あるいは了解があったのではないかとふと思ったことがあるが、新中国の周作人に対する処遇から推して、そのような事実はなかったであろうと考え、自らこの思いつきを夢想として斥けた。

先の証言の真憑性如何については今後の調査に俟つとして、これを契機に彼我に於ける周作人研究が少しでも進展することを切に願うものである。（一九八六・十・三十）

②周作人の教育督弁出馬は共産党の要請によるものであったという証言の紹介を頂点とする、一連の周作人の名誉回復を図ろうとする動きは、北京魯迅博物館魯迅研究室の陳漱滄氏（一月二日付中央党機関紙『人民日報』所載「周作人を通して民族の気概を語る」）及び上海社会科学学院の応国靖氏（二月五日付上海党機関紙『解放日報』所載「周作人の八名誉回復を分析する」）によって手厳しく批判されて、ひとまず頓挫した模様である。（一九八七・二・十一）